

見出しの誕生 : 新聞の視覚媒体的要素についての一断章

OKU, Takenori / 奥, 武則

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences

(巻 / Volume)

55

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

17

(発行年 / Year)

2008-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021049>

見出しの誕生

——新聞の視覚媒体的要素についての一断章——

奥 武 則

はじめに——本稿の課題

ある日の新聞

ささやかな「計量分析」から始めよう。

ここに新聞がある。2006年9月5日，朝日新聞東京本社発行13版。日時その他，この選択にはとりたてて「意味」はない。以下の分析を行うために私がたまたま手にした任意の新聞とさせていただいていい¹⁾。

1面トップには「福島県知事支援者ら逮捕／東京地検談合容疑／工事の仕切り役」²⁾という見出しの記事が載っている。この記事についても後にふれるが，まずは34ページの第2社会面を素材にする。新聞を後ろから開いていく。最終面のテレビ欄（この新聞では36ページ）を一枚めくると，左が社会面（35ページ），右が第2社会面ということになる。

第2社会面はその名の通り，社会面を補助する紙面である。1面はもとより，社会面に比べても，見出しはそれほど大きくなく，記事もそれなりの本数が載っている。第2社会面を素材にした理由は，こうした性格が，以下の分析に適合的であると考えたためである。

広告紙面を除いて記事面は9段。1段は記事の行数にして75行分。記事面総量は675行である（75×9）。ここには社告と「おわび」55行が含まれている。これを差し引くと，一般記事11本のスペースは620行になる。1行は11字だから，字数でいえば，6820字（620×11）である。以下，この字数をもとに考える（もちろん，この場合の字数は実際の字の数ではなく，前文の段組みや段

¹⁾ ある日の「朝日新聞朝刊」といっても地域によって同じものではないことは付言するまでもないだろう。ここで用いた「13版」は縮刷版に収録される最終版（14版）の一つ前の版である。筆者の居住地の関係でそうなったのだが，以下の分析には基本的に制約となるものではない。なお，本稿は脱稿後，筆者の事情により公表が遅れた。そのため，この《ささやかな「計量分析」》が対象にした新聞も少し古いものになってしまった。この間，新聞は2007年3月の毎日新聞を嚆矢に次々に活字を一角大きくした。朝日新聞の場合，2008年3月31日から1ページ15段を12段に，1段15字を13字に変えた。ただし，1ページ紙面における見出しが占める比率（本文で仮に「見出し率」としたもの）という点では大きな違いはないだろう。

²⁾ 現代の新聞見出しは多様である。活字だけでなく地紋をつけたもの（凸版見出し）も多く使われる。そうした形態を含めて本文に表記することは困難だが、「主見出し」「袖見出し」などを区別するために「／」を用いる。

落などで生じる空白を含めた「スペース」を表示するものである)。

11本の記事本文の量は、最高906字から最小110字まで合計4628字(平均値には意味がないが、いちおう計算してみると、420字)。写真はこの日の紙面には1枚しかなく、スペースは34字である。見出しに割かれたスペースは2158字ということになる(6820-4628-34)。したがって記事総量の中で見出しは31.6パーセントを占めている。この割合を仮に見出し率と呼ぼう。

一つの紙面ではなく個別記事についても見ておこう。対象にした紙面で一番見出しの大きな記事は「夫死後、凍結精子で妊娠／「父子」最高裁認めず／二審を破棄／法の不備指摘」というものである。「夫死後、凍結精子で妊娠」は半段を使った横見出し(白抜きベタ黒の凸版見出し)で、主見出しが「「父子」最高裁認めず」。全体として見出しは4段である。紙面全体に関して使った計量方法を使うと、記事全体は1056字で、本文は756字だから、見出しが占めるスペースは残り300字ということになる。見出し率は28.4パーセントである。

最初に紹介したこの日の1面トップ記事についても見出し率を算出してみよう。見出しを含めた記事総量は1793字。見出しは660字。見出し率は36.8パーセントになった。

さて、以上で「計量分析」はおしまいである。まことにささやかなものだが、どうやら現在の新聞では紙面のほぼ3割を見出しが埋めているらしいことが明らかになった。むろん、この数字はスペースに関するものであって、現在の新聞における見出しの質的分析ではない。だが、それでも現在の新聞にとって見出しがいかに重要なものであるかということについて、この「ほぼ3割」という数字を通じて実感できるように思う³⁾。

見出しへの視点

現在の新聞にとって見出しが重要であるということは何ら新しい発見ではない。むしろ自明のことだろう。「見出し読者」という言葉もある。忙しい現代人にとって新聞の見出しは、それを読むだけで記事のおおよその内容を教えてくれるものでなければならない。それだけに新聞の送り手にとっていかに「いい見出し」を作るかは重要である。試みにジャーナリズムの先進国・米国の比較的新しいジャーナリズムの教科書をのぞいてみたら、見出し(Headline)について書かれた部分に、次のような一節があった。

見出しは読者を記事に誘い込むために広告しているショーウィンドウである。……見出しのポイントは、正確であると同時にずばりと記事の中身を(読者に)知らせ、記事を売り込むことにある⁴⁾。

新聞(商店)の中に並んだ個別記事(商品)のうちどれを読むか(買うか)が見出しによって決

³⁾ これはいうまでもなく一般紙のケースであり、タブロイドの夕刊紙やスポーツ・芸能紙の場合、見出し率はずっと高くなるだろう。

⁴⁾ Richard Keeble(edit.) *"Print Journalism a critical introduction"* Routledge, 2005, P.112

まるというわけである。本稿の関心からいうと、「ショーウィンドウ」（原文は Shopwindow だが、日本語の感じではこちらの方が分かりやすいだろう）の比喩が示唆的である。

新聞を通じたコミュニケーションは基本的に読者が記事を「読む」ことによって成立する。記事を読む場合も視覚（目）が使われるわけだが、ふつう新聞を視覚媒体と呼ばない。主として写真や映像を通じてコミュニケーションがなされるものが視覚媒体である。

だが、一方で現在の新聞には「目で見える要素」があふれている。まずはいうまでもなく写真である。カラー印刷の技術発展によって連日カラー写真が載っている。そして、次が見出し。もちろん、見出しも「読む」ことによって初めてコミュニケーションが成立するのだから、同じ「目で見える要素」といっても写真とは基本的に違う。だが、先の引用にあったように見出しは「ショーウィンドウ」としての役割を果たす。「ショーウィンドウ」はまずは目で見えるものだろう。その意味で見出しは新聞における視覚媒体的な要素を大きく担っている。

総じていえば、「読む」媒体である新聞は一方で「見る」部分、つまり視覚媒体としての要素を強める道を歩んできた。今日の新聞は個々の写真や見出しだけでなく紙面全体のレイアウトにおいて、視覚に訴えるものになっている。

写真以前にも、もっぱら視覚に訴える要素が草創期の新聞にはあった。錦絵新聞と呼ばれる一群のメディアが、それである。多色刷りの大きな錦絵を中心にしてさまざまな出来事を人々に伝えた錦絵新聞はまさに視覚媒体にほかならなかった⁵⁾。

しかし錦絵新聞そのものの歴史は短く、新聞におけるこうした直接的視覚要素は連載小説の挿絵などのかたちで展開され、やがて大きな事件や出来事に際しても木版の挿絵（報道画）が紙面に掲載されるようになる。日清戦争（1894～95）時には報道的な要素の強い木版画が紙面を飾った⁶⁾。

⁵⁾ 江戸期から明治期にかけてのメディア史の中で読売瓦版—錦絵新聞—小新聞の系列を位置づけた研究に土屋礼子『大衆紙の源流—明治期小新聞の研究』（世界思想社、2002）がある。土屋は錦絵新聞を「もとは絵草紙という一つの名称のもとから流れ出た絵本、錦絵、読売瓦版という近世の視覚メディアを再統合した印刷物」と捉える。そして錦絵新聞は一方で「浮世絵の継承的発展」であるとともに「近代以降のポピュラー・ジャーナリズムの出発点」であり、「新聞紙の雑報に浮世絵師が挿絵を描く先駆けとなり、さらに後の漫画やテレビなどの視覚メディア、あるいは大衆ジャーナリズムにつながる表現形式であった」と指摘している（同書、p.105）。興味深い指摘ではあるが、後に述べる横浜毎日新聞創刊を起点とする近代日本の新聞ジャーナリズムは、視覚メディアという意味では、錦絵新聞といったんはっきり断絶していたこともまた間違いないだろう。

⁶⁾ 『明治二十七八年戦役統計』によると、日清戦争には画工11人、写真師4人が従軍している（大谷正「日清戦争報道とグラフィック・メディア—従軍した画工と写真師を中心に」（2006年9月9日、メディア史研究会発表）。輪転機で印刷する新聞の本紙に写真を直接印刷するのは技術的に困難で、写真印刷はまだ雑誌口絵・写真帳に適した技術だったという。

⁷⁾ 新聞における写真（その前身としての種々の絵画）の普及は本稿の主題にも深く関連する興味深い問題である。コンピュータ導入まで長く続いた網版による写真は1904（明治37）年1月2日、報知新聞1面に載った女性のポートレート写真が第一号とされる（小林弘忠『新聞報道と顔写真—写真のウソとマコト』中公新書、1998、p.45）

だが、写真そのものが新聞にかなりの頻度で載るようになったのは写真製版技術が普及した明治30年代後半のことである⁷⁾。

では、もう一つの「目で見える要素」である見出しはどうか。後にくわしくみるように、日本における近代的新聞の発祥とされる横浜毎日新聞創刊号（明治3年12月8日）の紙面にはまったく見出しはなかった。

見出しは、いつ、どのようにして生まれたのか。本稿は、まずはこの問いかけに答えようとするものである。

ここでの対象はもっぱら日本の新聞である。近代的な新聞は幕末・明治初期に新しい文物の一つとして欧米から持ち込まれた。したがって「見出しの誕生」についても本来、欧米新聞との比較・影響関係についての考察が不可欠だろう。私は基本的には以下に述べる「発展」経過が欧米の新聞にもみられたと考えているが、いまこの点についての実証的な検討は割愛せざるを得ない。

1 見出し以前

見出しのない紙面

近代日本の新聞が誕生するまでにはいくつかの流れがある。本稿ではそうした新聞史そのものの記述は省略する。一般に広く「近代的新聞の発祥」と認められている横浜毎日新聞⁸⁾を素材に見出しが誕生するまでを具体的に追ってみたい。

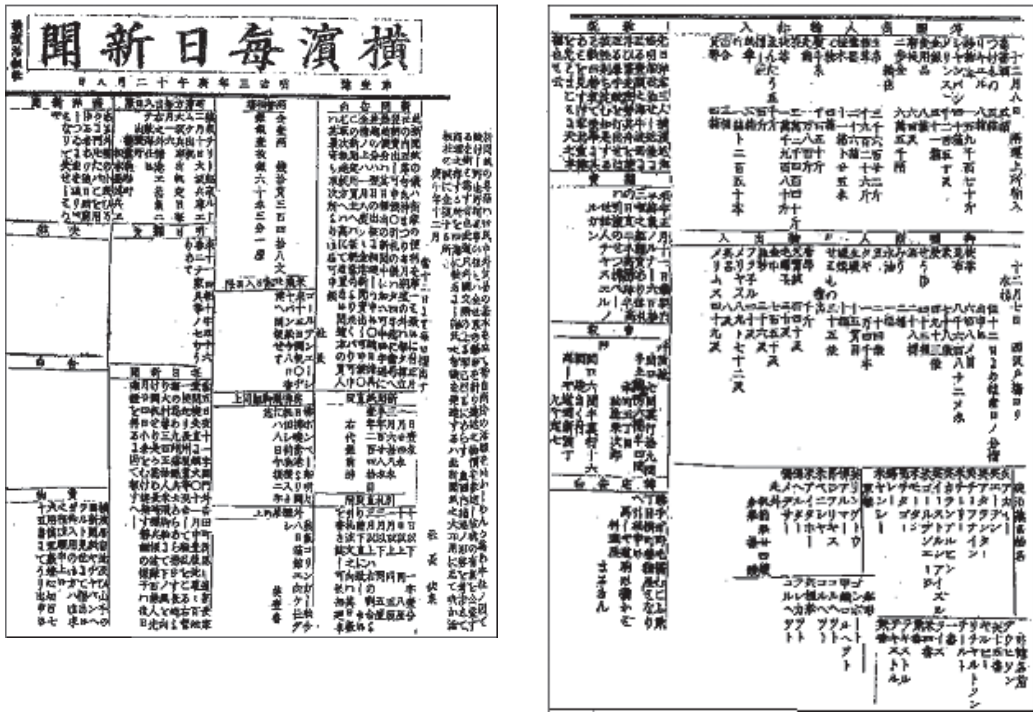
創刊号は裏表2ページ（図版1）。まことに稚拙な紙面といわざるを得ないのだが、近代日本の新聞はここから始まったのである。

冒頭に「社長 伏稟」とある一文が載っている（「伏稟」は「謹白」をさらに荘重にした感じか）。ただし、何のタイトルもない。いきなり本文であることに注意したい。

これを別にして、表面は、縦が4列に仕切られ、それぞれの列は横線でさらに大小異なる3～4に分割されている。紙面全体としては14区画に分類されていることになる。そこにはそれぞれ「新聞告白」、「新聞紙値段」、「引札値段附」、「両替相場」、「米飛脚船出入日限」、「回漕方船出入日限」、「毎日新聞」、「西洋新聞」、「失物」、「告白」、「賣物」といった横組みの説明がある（このうち、「失物」と「告白」は空欄。「値段」の「値」は違う字体が使われているが、分かりやすく「値段」としておく。また、「告白」は「告知」の意味で使われている。なお、以下新聞からの引用に際して

⁸⁾ 横浜毎日新聞の創刊は本文に書いたように明治3年12月8日（太陽暦では1871年1月28日）。日本における「近代的新聞の発祥」とされるのは、最初の日本語による日刊新聞で、従来の冊子型ではなく一枚の洋紙両面に印刷されていたことによる。当初の発行元は横浜活版社（舎）で、活字を使った活版印刷だった点もこれに加えていいかもしれない。ただし、当初は鉛活字ではなく木活字だったと思われる。同紙は後に東京に進出し、東京横浜毎日新聞、毎日新聞、東京横浜新聞と改題を重ねつつ、1940年11月に廃刊となった。現在の毎日新聞と系譜的なつながりはない。復刻版（不二出版、1998～1992）があるが、創刊当初の分に関しては未発見の欠号が多い。

図版 1



は、変体カナをふつうのカナ文字にし、一部の旧漢字を適宜通用漢字に改める以外はできるだけ原文のままにする)。

裏面も同じように区画化されているが、「外国商人輸出入」、「御國商人荷物出入」が大きなスペースを占めている。その下に「碇泊蒸気船名」があって、それぞれに「引請名前」、「船形」が記されている。左側の細い縦の区画に「雑報」、「糶賣」、「賣家」、「轉宅告白」4つの欄がある。

各区画の上に横組みで付された文字はそれぞれの欄の内容を示すものである。その意味ではタイトルとっていい。しかし、個々の記事に付せられたものではないから、後の見出しにつながるものとはいえない。そもそも先に述べたように大半の欄に載っている情報は今日のnewsではない。

今日のnewsにつながる記事は、表面の「毎日新聞」と「西洋新聞」、裏面の「雑説」の欄に載っているものだけである。「毎日新聞」には二つの記事が載っている。一つはごく短い火事の記事。「當五日夜十一字関門外吉田町新馬車道新長家壹間焼失直に鎮火」。これで全文である。この後、「○」があるだけで改行のないまま、豊後の百姓一揆の記事が続いている。「長州脱党等混合して騒乱とな」っていて、各地から鎮撫の兵が動員されている状況が記されている。二つの記事とも見出しはない。

「雑説」には一つしか記事はない。横浜湾で「洋客三人」が「海牛」に遭遇したが、危うく難を逃れたという話である。これも見出しはない。

こうして横浜毎日新聞創刊号を見てみると、当時どのような情報が求められて新聞が作られたのかがよく分かる。横浜港に出入りする船や実際の取引に関する具体的な情報が何よりも求められた

のである。今日の「新聞」という言葉からイメージするものに収まる記事は、かろうじて表面の「毎日新聞」、西洋新聞、裏面の「雑説」欄に載っているものに過ぎない。ちなみに、今日ふつう newspaper の意味で使われる「新聞」は当時、news の訳語として使われた。だから「毎日新聞」や「西洋新聞」の欄は、daily news と foreign news ということになる。「雑説」を含めて「近代的新聞」第1号にみられたこれらの欄が次第に肥大化することによって今日の報道新聞が生まれていった。

ともあれ、日本における最初の「近代的新聞」には見出しはなかったのである。

タイトルの登場

「見出しなし」の状況はその後も続く。しかし、変化もみられる。たとえば、明治5年2月23日発行（題字下に記された号数は「第三百七十五号」）。縦に区画されていた創刊号と違って、1面が3段（3段目が少し狭い）、2～3面が均等に4段、4面が大きく上下2段にそれぞれ区切られている⁹⁾。

上下2段になった4面の下段に次のような記事が出ている（原文はもちろん縦組みだが、なるべく記事の形態がわかるように表記した。ただし、原文は1行23字になっている）。

○

捨札の写

東京府貴族
小林金平妾
浅草駒形町
四番借地
きぬ
二十九

此もの儀妾の身分にて嵐璃鶴と密通の上主人金平を毒殺に及ぶ段右始末重々不届至極二付於浅草梟首に行ふもの也

右の通当月廿日捨札出たる趣嵐璃鶴は流罪に相成れりとの説

「捨札」は近世以来の高札の一種で、罪人を処刑した際に氏名・年齢・罪状などを告知した。ここで、さらし首になった「きぬ」は後に「毒婦・夜嵐お絹」として知られるようになる¹⁰⁾。

⁹⁾ 創刊号の縦区画は当時、横浜で発行されていた英字新聞ジャパン・ヘラルドの影響を受けたものと思われる。しかし、本文自体が横組みの英字新聞と違って本文は縦に表記される日本語の場合、縦区画はミスマッチだった。横浜毎日新聞の場合、確認できる範囲では明治4年6月10日（第百五十七号）に横罫線を使った「段」が登場している。この「段」は今日の新聞にまで通じる新聞の基本的なレイアウトであり、新聞の「日本化」の大きな一歩といえるだろう。見出しの誕生とその後についても少なくない意味を持つ。

冒頭の「○」が「前の記事とは別ですよ」と読者に告知するものである。本文は「行ふもの也」までが「捨札」を写してきたもので、その後は横浜毎日新聞が付け加えた文である。「○」の後の「捨札の写」も、むろん捨札にあったものではない。捨札の内容を掲載するに際して新聞製作者が付け加えたものである。いわば、記事のタイトルといえるだろう。区画した欄の分類項目名しかなかった創刊号に比べれば、明らかに「新しい要素」といえるだろう。しかし、こうした要素も一気に見出しの誕生にはつながらなかった。

その後、横浜毎日新聞は創刊号以来の稚拙な体裁を次第に脱却し、明治10年代になると、かなりきっちりした形態になる。1884（明治17）年12月16日の東京横浜毎日新聞（横浜毎日新聞を改題）を見てみよう。2面と3面は横罫線で5段に区切られ、1行23字の活字が1段50行ずつ整然と組まれている。記事の分量は創刊当時とは雲泥の差である。2ページの3段目の終わりから「雑報」欄が始まっている。次は冒頭三つの記事。以下のように並んでいる。

- 熊本県へ出張したる西郷農商務卿には一昨日帰京せしに付松方参議は其兼任を解かれたり
- 品川農商務大輔には高知、愛媛両県下巡視の爲め本日出発する由
- 陸軍将官会議は弥々昨日午前十時より本省内議事堂に於て開き続て朝鮮事件をも議したる由

いずれもごく短い記事だが、それでも冒頭に「○」があるだけだ。つまり、ここには「きぬ」の処刑を伝えた記事にあった「新しい要素」は消えてしまっている。

短い記事だけではない。4ページには全文61行に及ぶ記事がある¹¹⁾。冒頭は、いきなり「○飯田警報信州飯田の愛国正理社と云へるは自由主義を執る一の政社にて……」（傍点、本文）で、見出しはまったくない。「飯田警報」は記事の発信元を示す、後のクレジットにあたるものだが、空白もないままに引用したように本文とつながっている。ここにも「新しい要素」はない。

ただし、この日の「雑報」にも冒頭にタイトルが付いているものもある。次はその事例。

- 百余名の公判 静岡県下駿河国志太益津両郡及び遠江国榛原郡に住居せる米商が本年四月頃志太郡大新島村和田港の通船会社へ集会せし折右米商百余名には藤枝警察署へ召喚され取糺の上一時下けられしが愈々今十六日静岡軽罪裁判所に於て右百余名の公判を開くと云ふ

「○百余名の公判」の部分は本文活字と形態はまったく同じだから特に目立つわけではない。適

¹⁰⁾ この記事が伝える「きぬ」という女性が明治10年代になって「毒婦・夜嵐お絹」に変貌していく過程については、以前、「高橋お伝」らとともに「毒婦たちの時代」として考察したことがある（奥武則『スキャンダルの明治——国民を創るレッスン』ちくま新書、1998）。

¹¹⁾ 3ページに続報が載っている飯田事件に関するものである。飯田事件は自由民権期の激化事件の一つとして知られる。名古屋の民権結社と記事にある飯田の愛国正理社が提携して名古屋鎮台襲撃などを計画したが、未然に発覚した。

切なタイトルかどうか疑問だが、それでも、ここでは「いきなり本文記事」というスタイルは脱却されている。ここに「見出しの誕生」の前史があることはまちがいない。

しかし、「記事にはタイトルをつける」という点にはついて、この日の新聞ではまだ「揺れ」があったわけだ。ところが、翌12月17日の紙面になると、1面の「太政官録事」と「海軍省録事」（これらは「官報」的なものである）を除く、すべての記事にタイトルが付いている。新聞社として「タイトル付与」についての統一的な意思決定があったことはまちがいない。タイトルは頭に「○」を付し、本文との間に2字分の空白を設けている。「雑報」欄冒頭の記事を二つ、ここに引いておこう。

○参向 一昨日賢所に於て御神楽を行はせられ御代拝として鍋島式部長官参向畢りて二品彰仁親王同貞愛親王三品威仁親王川村松方両参議其他各省より勅任官一名并に宮内奏任判任官等参拜したり

○三参議集会 伊藤山縣の両参議其他の諸氏は一昨夜俄かに横浜へ赴き同時神戸より着港したる井上外務卿と共に同所富貴楼に於て集議したる趣又井上卿は同地に一泊昨日帰京せり

1884年12月17日、日本で最初の近代的新聞の栄誉を担っていた新聞は「見出しのある新聞」へ大きな一歩を踏み出したのである。

2 見出しの誕生

本文記事との差別化

見出しの条件とは何だろう。つまり、どういったものを見出しと呼ぶのか。すでに見出しについていろいろと言葉を重ねてきていまさらこうした問いかけを発するのは妙に思われるかもしれない。しかし、この問いに答えておくことが、これから先の議論には欠かせない。

すでに「タイトルの登場」については明らかにした。では、「タイトル」と「見出し」は、どう違うのか。「タイトルの登場」は要するに「見出しの誕生」ではないのか。こういった疑問があるだろう。タイトルは単なる表題である。これに対して見出しは記事の内容を示す。まずは、このように説明できる。しかし、「見出しへの視点」で述べたように、本稿は新聞の視覚媒体的要素にかかわるものとしての見出しに注目している。内容よりその形態の違いこそ重要である。第一に活字の大きさ。さらに、単なる2字分の空白といったものではないかたちで、本文記事と別の独自のスペースを持っていることが見出しの重要な差別指標となろう。

東京横浜毎日新聞は1884年12月17日以降、ほぼすべての記事にタイトルが付く新聞になった。だが、そのタイトルは、すでに指摘したように、本文冒頭に「○」を付し、本文とまったく同じ大きさと形態の活字を使ったものだった。「○」以外には2字分の空白だけが本文との差別化を担っている。

「目で見る」という点からはこの程度の差別化は不十分といわざるを得ない。現在の新聞の見出

しは何より形態において記事本文とは違うことが一目瞭然である。つまり、記事の種類と扱い¹²⁾によるが、いずれにしろ本文記事より格段に大きな活字を使い広いスペースをとって見出しは載っている。この形態の違いが以下、その誕生を検討する見出しの条件である。形態として本文記事とはっきりと差別化された見出しは、いつ生まれたのか。

活字を本文記事より大きくすること。これが形態としての差別化の出発になるだろう。東京横浜毎日新聞の場合、タイトル登場から約5カ月後の1885（明治18）年4月5日の紙面を見ると、ようやく見出し的なものが登場している。

1面は題字の下が横罫線で4段に区切られた1面。「太政官録事」など、記事の分類項目がほんの少し大きな活字と両側を縦罫線で仕切ることによっていくぶん差別化されている。分離項目の一つに「毎日新聞」（前に述べたように daily news の意味）があって、この冒頭に本文記事とは別立てで「五万ノ佛兵支那地方ニ向ハントス」とある。記事は越南（ベトナム）の支配権をめぐる清仏戦争（1884～5年）にかかわるものだ。この15文字の一文は記事の内容を示している点で、単なるタイトルを超えている。ただし、大きさは本文記事と同じで、形態的な差別化という見出しの条件は満たしていない。こうしたものを以下、「プレ見出し」と呼ぶことにしたい。

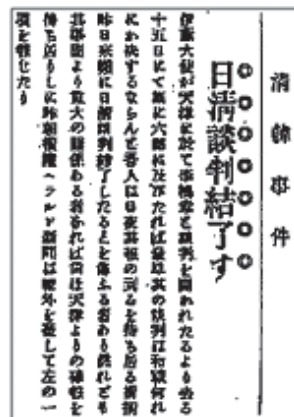
この日の2～3面の「雑報」欄にはプレ見出しがいくつも登場している。ただし、形態的には相変わらず本文との「○」と本文記事との2字分の空白が差別化を担っているだけだから、本文記事と別立てになった1面の「五万ノ佛兵……」よりも「プレ」度は大きい。これらのプレ見出しのいくつかには「傍点」付きのものもある。これも本文記事との差別化をはかった工夫である。

プレ見出しが数多く見られるこの日の新聞には、すでに述べた見出しの条件をほぼ満たしたものが一つだけある（図版2）。これは1面の「清韓事件」に区分されている記事の一つだが、冒頭に

図版2



図版3



¹²⁾「扱い」という言葉はここでは新聞製作現場の特殊な用語として使われている。個々の記事に何段の見出しをつけるか、逆にいえば、そのニュースを何段で紙面に掲載するかということが、「扱い」である。ニュース・バリューの判断といってもいい。

それ以前の記事と区別する縦の飾り罫が入っている。これだけでも「特別扱い」といった感じがあるが、「○」の後の12文字には「◎」が付され、活字も本文活字よりほんの少し大きい。「佛国東京に五万の兵を出す」も単なるタイトルではなく、本文記事の内容を示したものである。ただ一つ、本文記事と別立てになっていないという点だけが、見出しの条件を欠く。

その後の東京横浜毎日新聞を見ていくと、プレ見出しとタイトルの混在が続く。ようやく1885（明治18）年4月18日の紙面に本文記事との差別化という点で見出しの条件を満たすものを見出すことができた（図版3）。管見の限りでは、これが東京横浜毎日新聞における「最初の見出し」である。本文活字の左右ほぼ2倍の大きさの活字を使って「◎」で強調し、「日清談判結了す」と記事の内容をずばりと提示している。

横浜毎日新聞（東京横浜毎日新聞）の場合、「見出しの誕生」まで、創刊から実に15年もかかったのである。

「段」というハードル

こうしていちおう見出しは誕生した。しかし、それは長く例外的なものにとどまっていたようだ。たとえば、1892（明治25）年11月1日に創刊した萬朝報の創刊号を見てみよう。東京横浜毎日新聞における「見出しの誕生」から7年半余が経っている。

全面広告5ページを含めて全12ページ。堂々たる作りである。だが、記事に関する限り、本文と差別化した大きな活字を使った見出しは一つもない。本文より大きな活字を使っているのは、1面冒頭の「発刊の辞」、連載小説の題名（「金狐」）、2面の「電報」、3面の二つの読切小説の題名（「父知らず」と「田舎医者」、後者は4面にも続いていて三つの章の名前も少し大きな活字になっている）に過ぎない。記事には上部に「●」、文字に傍点（小さな●）を付し、本文記事との間に2字分の空白を設けたタイトル（ないしはプレ見出し）があるだけである¹³⁾。

萬朝報はやがてセンセーショナルなスキャンダル報道で部数を短期間に拡大していく。「相馬家毒殺騒動」「淫祠蓮門教会」などがよく知られている¹⁴⁾。「相馬家毒殺騒動」は1893（明治26）7月以降、萬朝報の紙面で大展開される。「淫祠蓮門教会」は翌1894（明治27）年2月から始まった連載企画だが、萬朝報は関連記事を含めて、当時多くの信者を集めていた蓮門教を淫祠邪教として糾弾した。こうしたスキャンダル報道の中では大きな活字の見出しが紙面に躍った。ときには本文の中にも大きな活字を組み込んで読者の目をひきつける手法も使われた。

萬朝報が突出していたとはいえ、各紙も同じ道をたどる。見出しはよくやくショーウィンドウと

¹³⁾ これはあくまでも記事の見出しに関することで、視覚媒体という点では1、3、4面に連載小説、読切小説の挿絵が三つ大きく載っている。いずれも紙面のかなりを埋める大きさである（1面の場合、全5段の紙面の下2段をほぼ埋めている）。また、広告紙面についてはまったく別の状況がある。この点に関しては本文で後にふれる。

¹⁴⁾ この二つの事例を含めて萬朝報のスキャンダル報道の具体的展開とそれが近代の国民国家形成に果たした意味については、奥武則、前掲『スキャンダルの明治』参照。

しての役割を果たし始めたのである。だが、現在の新聞にみられる見出しと同じものは実のところ、まだ生まれていない。

新聞紙面の構成の基本は「段」である。横浜毎日新聞が創刊まもなく横罫線で仕切った紙面に変わったことを前に指摘した。横罫線で仕切られた部分が、つまり「段」である。この段の形態はその後の各新聞で受け継がれる。たとえば萬朝報の場合、創刊からまもなくは5段で紙面を構成している（後に10段に増える）。東京朝日新聞の場合、8段である。この段構成はいうまでもなく基本的には現在の新聞の同じである。

誕生した見出しは活字の大きさと本文記事と差別化した。独自のスペースも持つようになった。しかし、「段」を越えることはなかったのである。長い見出しもその記事の「段」の中に織り込まれていた（図版4）。これに対して現在の見出しはもちろん一段に収まっている小さな見出し（ベタ見出し）もあるが、多くの場合、見出しだけ「段」をまたがっている。記事の大きさを示すとき、「○段見出し」といったりするの、見出しのこうした形によることはいうまでもない。

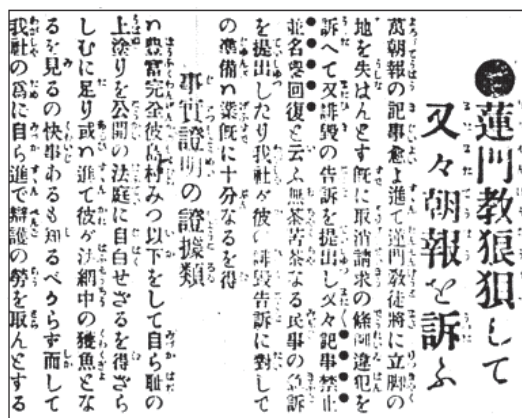
見出しはいつ、「段」を越えたのか。

見出しにとって「段」は予想以上に高いハードルだったようだ。記事そのものが通常の1段を越えたかたちで生まれ、それに伴ってふつうの見出しより長い（つまり、長さだけは「段」を越えている）見出しががついているケースはある時期からかなり見られる。しかし、記事は通常の「段」の範囲で見出しだけが「段」を越えているという現在の新聞に一般的なスタイルは、ずっと後になって登場する。

すべての新聞を渉猟したわけではないので、確実にこれが最初の「段越え見出し」と指摘することはできない。萬朝報についていえば、管見の限り、1912（明治45）年7月30日付け¹⁵⁾に最初に登場する。

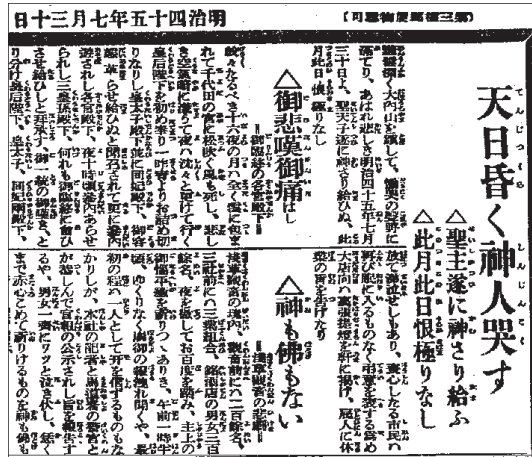
この日は明治天皇の「崩御」を伝えた紙面である。萬朝報は紙面全体を黒枠で囲み、1面真ん中

図版4



¹⁵⁾ 日本の年号としてはこの日から大正元年が始まったわけだが、新聞の日付はまだ明治になっている。

図版5



に明治天皇の肖像画（「御真影」として知られるものである）を3段の大きさに載せている。しかし、天皇の死去を伝えるトップ記事の見出しは「天皇崩御」とあるだけで、活字は左右が一般活字の2.5倍ほどあってかなり目立つが、「段」は越えていない。

「段越え見出し」は3面に登場している（図版5）。3面全体はやはり黒枠で囲まれていて、「天皇崩御」に悲しみにくれる国民の様子などを報じたものだが、「段越え見出し」はトップに据えられているだけで、後は大きな活字は使われているが、従来のかたちである。

東京朝日新聞の場合は、どうか。「段越え見出し」の登場には同紙も長く時間がかかった。ただし、萬朝報では「天皇崩御」を伝える紙面に最初の「段越え見出し」が登場したのに比べると、朝日の最初の「段越え見出し」は少し早かったようだ。だが、これも天皇に直接かかわる。明治天皇の危篤が伝えられる中、死去8日前の7月22日の東京朝日新聞4面のトップに「段越え見出し」が使われている。

大活字の「御病状依然」が2段分を埋める主見出しで、「△両内親王各国使臣其他△踵を接して参内御見舞」という袖見出しが「△」を頭に2行にして添えられている。翌日も4面トップに前日と同じようなかたちで「御病状混沌」の2段の「段越え見出し」。袖見出しは「▽御経過良好なれども▽茲一週間は警戒を要す」。やはり「▽」（なぜか前日とはさかさまだが）を頭に2行にしてある。

7月30日、「崩御」を報じた朝日は4面トップはやはり2段分の「崩御前の御経過」が主見出しである。袖見出しは「▽悲しむべき御臨終の記録▽六千万の赤子皆色を失ふ」。これも前日までと同じ体裁の2行。

「天皇崩御」は近代日本に誕生した新聞というメディアが最初に経験する特大のニュースだった。このニュースを契機にして見出しが、長く越えることができなかった「段」というハードルを越えたのは当然だったかもしれない。

大正期になると「段越え見出し」は珍しいものではなくなる。もっともまだ2段見出しがせいぜ

いである。しかもいくつもの見出しが横罫線を分断するという紙面構成（現在の新聞ではこれが常態である）にはなっていない。一つの紙面に2段見出しの記事が二つある場合は、同じ位置で並ぶか、あるいは、別の2段で見出しを構成するかたちになる。これはおそらく組み版上の技術的制約があったためだと思われる¹⁶⁾。そうした点を含めて誕生したばかりの見出しと現在の新聞における見出しとの間にはまだまだ相当の距離があるのだが、以上で「見出しの誕生」の過程はほぼ明らかにできたと考える。

もちろん見出しにかかわる問題はまだいくつも残っている。とりわけ「見出し誕生」の過程そのものとは別に、その背景に明らかにすることが重要だろう。つまり、なぜ、新聞は見出しを持つようになったのか、誕生した見出しはなぜ「進化」を遂げることになったのか、そこにどのような「力」が働いていたのか——こうした一連の問いがすぐに思い浮かぶ。

この点についての詳細な検討は他日を期したいが、一言でいえば、見出しは新聞というメディアの大衆化を背景に生まれたといえるだろう。新聞は誕生からかなりの期間、一般大衆が簡単にアクセスできるメディアではなかった。かなりの教養がなければ、新聞を読み、理解することは難しかった。したがって読者も限られていた。民衆の識字率の向上などを背景に新聞が大衆メディアになるのは明治後期、さらにいえば大正期以降だろう。こうした新聞の大衆化がより読みやすい形態としての見出しを生み出したのである。

おわりに——見出しの「その後」

新聞広告の場合

誕生した見出しはその後、現在の新聞見出しとの間の「相当な距離」をどのように埋めていったのか。この点が新聞見出しの歴史記述という点では明らかにすべき次なる課題となろう。この点についても本稿では以下若干の見通しを述べるにとどめざるを得ないのだが、その前に同じ新聞紙面という意味で広告について簡単にふれておきたい。

これまで新聞に見出しというものが誕生するまでにはいくつかの段階があり、最終的には「段」という高いハードルがあったことを述べてきた。これはむろん新聞記事に関してのことである。新聞には当初から記事以外に広告が載っていた。最初に紹介した横浜毎日新聞創刊号（図版1）にも、すでに「引札」というかたちで広告が出ている。表面には「新聞紙値段」とともに「引札値段」も掲載されている。

次の第三号（明治3年12月14日付け、第二号は復刻版未収録）には実際に「引札」「引フダ」の欄があって、近く横浜港を出航する船について代理店と思われる商社が出航日を告知した「広告」

¹⁶⁾ 複数の見出しが横罫線を複雑に分断するかたちで版の組むにはさまざまな長さの罫線を用意しなければならない（一般印刷物と同様、新聞でも鉛活字が消えて久しいが、鉛活字を組んで新聞紙面を作っていた時期は、当然のことながら、罫線もすべて金属製の「実物」があった）。

などが載っている。ただし、活字の大きさはすべて記事と同じである。

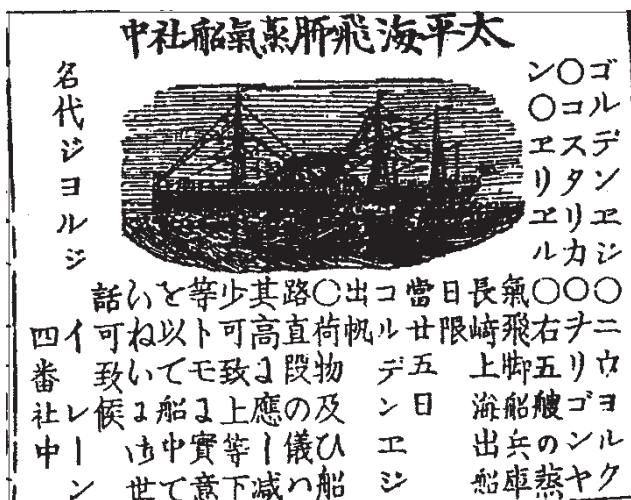
ところが、現存する横浜毎日新聞の次の号である第二十九号（明治4年1月20日付け）になると、何と早くもこの分野では技術革新があったことが分かる。図版6はこの日の紙面のトップに据えられているものである。「引札」と書かれていないのだが、今日の広告にあたる。「太平海飛脚蒸気船社中」と太く大きな活字が横にあって、その下には船の絵まで添えられている。ほかにも「仕立物師」「西洋諸産物所」など、この日の紙面の引札では本文より数段大きな字が使われている。記事においては長い時間を要した「目で見える要素」は、こと広告についていえば、ごく初期から登場しているのである。

新聞の広告紙面にみられた「目で見える要素」はその後も記事面を置いてきぼりにして急速に進化する。ここでは「途中経過」を省略して、新聞記事にようやく「段越え見出し」が登場した時期について見てみよう。図版7は明治天皇の「崩御」を伝えた日の東京朝日新聞の1面である¹⁷⁾。

大半を埋める書籍と雑誌の広告に加え、丸善による万年筆の広告が載っている。記事紙面に比べ、ここでは「目で見える要素」が強く意識されている（それこそ一目瞭然か）。白抜きの凸版が多用され、新聞記事では長く高いハードルだった画一的な「段」はとっくに消えてしまっている。見出しという点でも、トップに据えられた「世態人情論」という本の広告には「●善く戦ふ者は敵を知る」「現実生活の勝者たらんと欲する者は先づ須く世態と人情とに通ぜよ」という、見出しといていいものが付いている。記事の「段」としてはこの「見出し」は3段以上になる。

新聞紙面の「目で見える要素」に関して、当初から広告において突出して進化を遂げたのは当然といえば当然のことである。凸版の製作や大きな活字を使った組版には時間がかかる。広告紙面は事

図版6



図版7



¹⁷⁾ 1面全面が広告に割かれていること自体が今日の新聞の常識を超えるが、この点は当時の東京日日新聞も同様である。ただ、「天皇崩御」にもかかわらず、このように日常的紙面を作っていたことには、ある種の驚きを禁じえない。

前に作っておくことができるから、記事面と違って、この点での制約が少ない。こうした技術的な要素に加えて、より重要なのは広告そのものの性格である。見出しについて「ショーウィンドウ」という表現を紹介した。新聞の載る広告の多くはまさに商品の「ショーウィンドウ」そのものとして存在する。「目で見える要素」は不可欠なのである。

「ショーウィンドウ」の危うさ

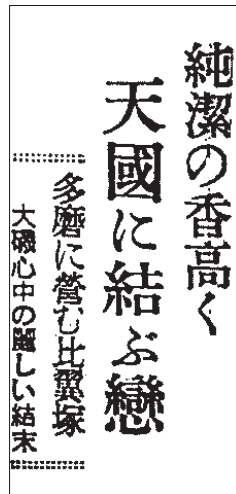
「目で見える要素」を早くから進化させた広告に比べて、「段越え見出し」が登場して以降も、この点での記事面の歩みは遅々たるものだった。それでも方向は一貫していた。「ショーウィンドウ」は次第に華やかさを増し、通り過ぎる人々の目を惹くものになっていったのである。

やがて、この「ショーウィンドウ」は個々の「商品」を紹介するだけでなく、一押しの売り物から均一値段の品物まで、商店の品揃え全体を示す「ショーウィンドウ」群に進化していった。つまり、個々の記事内容を要約的に読者に伝えるだけでなく、多くの記事のニュース価値を序列化し、読者に提示する役割を果たすようになったのである¹⁸⁾。

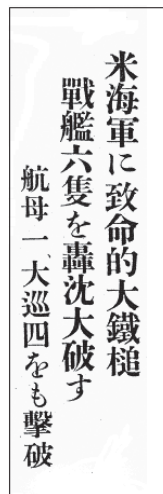
いま、新聞を開く読者は大小さまざまな見出しや写真によって構成されている紙面を目にする。記事面についていえば、単一の大きさの活字が右から左まで並んでいた初期からかなりの時期までの新聞と比べれば、それは立派な「視覚媒体」といっていいだろう。読者は視覚に導かれつつ、「読む媒体」としての新聞に接近していくことになった。

この過程で「ショーウィンドウ」群はその構成が巧みになっただけでなく、個々の「商品」陳列

図版 8



図版 9



¹⁸⁾ 新聞社の組織についてふれる機会がなかったので、ここで注記しておく。大阪朝日新聞社の場合、1894（明治27）年に「本社通則」を改正した際に編輯課内に「紙面整理掛」を新設された（『朝日新聞社史 明治編』p.298）。ただし、これが後に「整理部」に発展し、取材部から出稿された原稿を一手に扱い、見出し、レイアウトなどを担当するようになったのはずっと後のことのようにだ。1922（大正11）年1月現在の東京朝日新聞社の機構図には「整理部」がある（『朝日新聞社史 資料編』p.22）。

の仕方（表現）も変化していった。図版8は、その過程で生まれた一つの「傑作」とされるものである。1932（昭和7）年5月9日、神奈川県大磯町の大磯駅の裏山で、若い男女の心中死体が見つかった。これを最初に報道した同日発行10日付けの東京日日新聞夕刊は「草花を枕辺に大磯心中」という一段見出しだった。まだ身元が分からなかったこともあって、いくぶん感傷的な見出しが、その後の展開を予測させないことはないが、いずれにしろ、目立つ記事ではなかった。

ところが、仮埋葬されていた女性の遺体が消えてしまうという猟奇的な展開もあって、事件は翌日以降、大きく報道される。最後には「天國に結ぶ恋」と謳いあげられることによって、ありふれた心中事件は美しいラブ・ストーリーに昇華された¹⁹⁾。

若い男女の浅慮を美化するだけなら大した害はないのだが、こうした方向に「進化」した見出しは読者の意識をさまざまなかたちに導くことになった。それはときに「煽動」といっていい種類のものであったことを忘れてはならない。図版9は太平洋戦争期の新聞紙面にいくらかでも「同類」を見つけることができる「戦果」を大々的に報じた見出しである。

むろん戦時下のこうした見出しのような露骨な「煽動」は今日の新聞にはみられないだろう。だが、本来「読む媒体」である新聞の中であって「視覚媒体」としての要素を大きく担うものとして登場した見出しが、新聞に接する人々の媒体への接し方（どの記事を読むか）と意味の受容（どう理解すべきか）に深くかかわっていることもたしかである。

私たちは「ショーウィンドウ」に幻惑されることなく、「商品」の中身を吟味できる能力を磨かなければならない。新聞見出しの誕生をつづった短い「物語」の終えるにあたって、陳腐であることを承知で、このことを指摘しておきたい。

余話として

小稿のささやかな実証的追跡は以上で終わる。以下、個人的な「思い出話」を付け加えることをお許しいただきたい。

大学教員になる以前、私は新聞社に長年勤務していた。20代後半の3年半ほどは整理部で仕事をしてきた。記事に見出しをつけ、一面に組み上げる部門である。見出しとの直接的なかかわりは、そのときに生まれた。見出しをめぐる、このような小稿を書くに至った理由の一つは、私自身、見出しの「作り手」だったこともあるだろう。

だが、ここに余話として記しておきたい「思い出話」は、それ以前の駆け出し記者だったころのものである。1970（昭和45）年11月24日、鹿児島市の日豊本線で急行列車の脱線転覆事故があった。その年4月、鹿児島支局に配属され、警察を担当していた私はむろん現場に飛んだ。線路に転落したダンプカーに列車が衝突したもので、死者2人、重軽傷者32人が出る大事故だった。事故は午

¹⁹⁾ この事件は映画や歌謡曲に歌われ、心中の現場であった大磯駅裏の雑木林の山（坂田山）は心中の名所になった。「天國に結ぶ恋」が少なからぬ影響力を発揮したというべきだろう（奥武則『大衆新聞と国民国家』平凡社、2002年）。

前中に起き、夕刊に初報が載った。鹿児島市は夕刊のない統合版地域だったから、新米記者は翌日の朝刊早版で、この事故の記事を読むことになった。

ある新聞の社会面の雑感記事の見出しは「血塗られた新婚旅行」だった。別の新聞は「飛び散る新婚ムード」の見出しで、前文の書き出しには「新妻のピンクの帽子、友人が贈ってくれた婚礼の花束が無残に飛散る」とあった。これらの見出しと記事が読者に与えた事故のイメージは「新婚旅行を楽しんでいたカップルが悲惨な事故にあった」というものだったに違いない。

もう40年近く前の話だから、理解に苦しむ人が多いだろうが、当時、宮崎県はもっともよく新婚旅行に選ばれる場所だった。脱線した宮崎から鹿児島に向かう急行列車「錦江1号」も、一時期、「新婚列車」と呼ばれるほど新婚旅行客が目立つ列車だった。ところが、この死傷者34人の中に実際には新婚旅行客は1人もいなかった。おそらく転覆した1両目が普通車両で、いまふうというグリーン車ではなかったためだろう。新婚旅行中の乗客はいたかもしれない。だが、いずれにしろ、実際の事故と新聞見出しが読者に与えたはずのイメージとは著しく乖離していたものだったことはまちがいない。

事故の初報は前述のように前日夕刊だった。初報段階でイメージが先行したとしても、それなりに理解できないわけではない。だが、翌日朝刊までには十分取材の余裕があった。にもかかわらず、最初の「新婚列車イメージ」がそのまま引き継がれてしまったのである。いや、実は問題はそこにとどまらない。現場で右往左往した新米記者として確かに証言できることなのだが、記者には「新婚さんの談話を取れ」というデスクからの指示があった。

私が新米記者として体験した出来事は次のように整理できるだろう。事故の一報を受けた取材者は「新婚列車」のイメージに飛びついた。それは、いわば新聞が持つセンセーショナルな体質ときわめて親和性の高いものだった。このイメージも基づく「記事づくり」は夕刊のみならず、事実をフィードバックすることによってイメージを修正する時間的余裕があった朝刊段階も受け継がれた。しかも、こうした出来上がったイメージは逆に現場の取材の方向をも規制することになった。これはまことに倒錯的な事態といわざるをえないだろう。

まことに私たちは「たいていの場合、見てから定義しないで、定義してから見る」²⁰⁾のである。そういう私たちにとって、新聞の見出しは、その大小も含めて、まさに便利な事前の「定義」として与えられているのだ。私が昔々経験したささやかな出来事は、その意味では見出しの問題性を考える際の重要な論点につながるものでもあったらいい。だが、「余話」はここまでにしておこう。

²⁰⁾ ウォルター・リップマン『世論』（掛川トミ子訳、岩波文庫・上下、1987年）下、P.109